

メルヴィルの『ピエール』(3)

——天上の愛、地上の愛と嫉妬心——

五十嵐 博

Melville's *Pierre* (3)

—— Heavenly Love, Earthly Love, and Jealousy ——

Hiroshi IGARASHI

Abstract

Pierre is a story of an innocent young man initiated into the heartless world, discovering sexual desire and jealousy in the depth of the human heart. Beneath its main theme of Pierre as “the Fool of Truth” against the worldly “virtuous expediency,” there runs the collateral or secondary theme, i.e. a juxtaposition of heavenly love with earthly love, and moreover, as the third and final theme, jealousy shoots out of the first and second themes through the illustrations of Glen’s jealousy against Pierre and Isabel’s jealousy for Lucy.

Lucy and Isabel, evolving out of innocent, pure Yillah and proud, sensual Hautia in *Mardi*, personify heavenly, superhuman love and earthly, carnal love respectively. Lucy is portrayed in heavenly blue and innocent white as a good angel, whereas Isabel is depicted in black as a bad angel. Isabel’s long hair covering Pierre’s heart and body like “ebon vines” in the end is emblematic of the dark and woeful side of the human heart where sexual urge and jealousy lurk.

6. もう1つのテーマ——天上の愛と地上の愛

メルヴィルは作家として、真実対現実を生涯のテーマとしたと概括できる。前作『モービー・ディック』で彼はマプル神父の口を通して「虚偽の面(おもて)に向けて真理を説く」(MD48)¹⁾ 姿勢を明言し、白い鯨に化身させた偽善、ユダヤ・キリスト教の神を後ろ盾とする白人キリスト教文明社会の偽善を象徴的に糾弾し断罪したが、続く『ピエール』では、その真理追求精神をピエールという名の「真理の道化」(P358)²⁾ に姿態化し、牧師フォールスグレイヴやいとこグレンの言動が例証する世間の「有徳の便宜主義」との対決をテーマとした。同時に、これと並行してメルヴィルは、ルーシーとイザベルの言動を通じて天上的な愛と地上的な愛を描出し、この2つの愛の対置を『ピエール』の副テーマとしている。

第14書に挿入されているパンフレット“EI”の「第1講」には「クロノメトリカルなものとはホロロジカルなもの」という表題が付けられており、この比喩的表題が意味するところのものは、天上的な基準による行動と地上的な

基準による行動の対比であるが、この対比はピエールに対するルーシーの愛とイザベルの愛にもあてはまる。ルーシーのクロノメトリカルな愛、つまり天上的な愛とイザベルのホロロジカルな愛、つまり地上的な愛との対比は、アガペーとエロスの対比のようなものであるが、メルヴィルは、アマランスとキャットニップを隠喩として使いながら2つの愛を語っている。

メルヴィルは物語の始まりで、母メアリの「アマランスのように、しばまない美しさ(amaranthiness)」(P5)という描写中で1度だけアマランスに言及し、その後は全く言及せず、物語の終わり近くになってピエールが見る幻覚の中でアマランスをキャットニップとともに登場させている。ピエール、イザベル、デリイの住居にルーシーが来て一緒に住むようになってから数日後の物語終局間近、ピエールは半無意識状態の中で、田舎にある先祖の館と地所を取り囲む丘陵地にそびえ立つタイタンたちの山の幻影を見る。その山の絶壁周辺の台地の牧草地には、白い花を咲かせるアマランスと、所々に芳しいキャットニップが茂っている。

白い花を咲かせるアマランスは、ピエールの祖父が自分

の愛馬の飼葉用に種を蒔いて繁殖させた「クローバー」(P31)を指すと思われるが、この「小さく白い、アマランスのようにしぼまない花」(P342)は家畜の食用とはならず増殖し続け、初夏になると残雪のように輝く白さは、小作人たちの目には「不毛、不妊の表象」(P343)と映ずる。「不毛で無臭の不滅性」(P344)をもつ「天上の花」(*ibid.*)は、ルーシーを連想させる。キャットニップは「あのいとしい農家の草、キャットニップの植込みの甘い芳しさ」(*ibid.*)と語られていて、農家で暮らしていたイザベルを想起させる。そして作者は、2つの愛を表象する2種の草花の説明を「キャットニップとアマランス！人の地上での家庭の平安と、やむことなき神への渴望」(P345)と締め括って、現世を表すキャットニップと天上の真理を表すアマランスを対比させている。

6.1 善き天使と悪しき天使

メルヴィルは『ホワイト・ジャケット』の軍艦内図書室の蔵書リスト中でマーロウの『マルタ島のユダヤ人』に触れており(WJ168)³⁾、また、グレンディニング家の召使の1人をクリストファー(Christopher)と命名しているが、『ピエール』での善き天使と悪しき天使の発想と使用はクリストファー・マーロウの『フォースタス博士』にその源があると推量してさしつかえなからう。

マーロウの善き天使と悪しき天使は宗教的な色合いが濃厚で、善き天使は「聖書を読め」(I. 72)⁴⁾、「天国と天上的なことを考えよ」(V. 21)とフォースタスに諭すが、フォースタスの死の1時間前になると「おまえは世俗を愛した…地獄が大口を開けておまえを待っている」(XIX. 101, 115)と言って消える。他方、悪しき天使は「天上のジュピターのような存在に地上でなれ」(I. 75)、「名誉と富を考えよ」(V. 22)と言うが、最後には「私の言うことを聞いたので、地獄の苦痛を永劫に味わわなければならない…快楽を愛する者は快楽のために堕ちなければならない」(XIX. 102-3, 130)と結ぶ。メルヴィルの善き天使と悪しき天使には、マーロウの天使たちほどには宗教的寓意が込められていない。しかも、マーロウの天使たちがあくまで霊的な寓意的存在であるのに対して、メルヴィルは2人の天使に人格を与え、生身の女性に姿態化して登場させている。

ルーシーとイザベルという人物設定は、『マーディ』のイラーとホーシャの延長線上にあり、善き天使と悪しき天使としての認識は『マーディ』にその萌芽を見ることができる。『マーディ』の失われたイラー探求物語の終局近くで歴史家モヒが語る伝説中に登場する「より純粋な心をもった、翼ある存在」(M642)⁵⁾は、純粋さとイノセンスの象徴としてのイラーと同種の存在であり、この天使たちをマーディなる現実世界から駆逐した女王の末裔が、性と現世の歓びを象徴するホーシャであった。そしてメルヴィルは、イラーを善き天使としてのルーシーに、ホーシャを悪

しき天使としてのイザベルに変容させて『ピエール』に再登場させたと推断できる。

『ピエール』でメルヴィルは天使という言葉をも、まず、ピエールの葛藤する心の声の擬人化で使用し、次にピエール自身を指して使い、その後、ルーシーとイザベルを指して使用している。

メルヴィルが天使という言葉をも、善き天使と悪しき天使とに二分してこの作品で最初に使用するの、見知らぬ人物から手渡された手紙を無意識の内に半ば引き裂いたまま手にしている状態のピエールの心理の葛藤を語る時である。その時、ピエールは「2つの敵対する作用を自分の内に」感じ、「両者が彼の心を支配しようと闘っていて、最終的にどちらが優位を占めるかは、彼自身が唯一の審判者となる…と思った」(P63)。悪しき天使は、手紙を完全に破れとピエールに命じ、読まずに利己的な幸福を追求せよと言う。善き天使は、男らしく不安を捨てて手紙を読めと命じる。善き天使はピエールに、利己的でなく、むしろ利他的な行為を要求し、「読んで、義務を果たし、使命達成の祝福を受けて、幸福に関心を払うな」(*ibid.*)と言う。最終的にピエールの「気高い心」は「読まないで、いとしいピエール。破り捨てて幸せになって」と言う悪しき天使を吹き消し、「悲しげな、しかし優しい笑みを浮かべた」(*ibid.*)善き天使が勝利する。ここでは、2人の天使のどちらがルーシーか、あるいはイザベルかは判然としない。イザベルがまだ物語に登場していないこの段階では、ピエールの心理状況はルーシーかイザベルかの選択の板挟みにはない。したがって、ここでの2人の天使は、ルーシーのもつ両側面、より正確な言い方をすれば、婚約者ルーシーの気持を代弁するピエールの2つの相反する声の擬人化としてとらえられよう。善き天使、悪しき天使なるものは、当然、人の心の2面を代弁する声ではあるが、しかし、この作品では、ルーシーとイザベルに姿態化された2人の天使はピエールもしくは他の登場人物の心の内の対立を代弁してはいない。ルーシーとイザベルの言動は、それぞれ天上的愛と地上的愛を対照的に発現しながらも、別個の独立した人格のものとして描き出されている。

『マーディ』のイラーとホーシャは、別個の存在として描かれながらも、同一存在が宿す2つの相反する側面、すなわち昼の顔と夜の顔、善と悪、理想と現実の具象化であることが叙述と台詞中に暗示されていた。⁶⁾これに対して、ルーシーとイザベルは、作者が彼女たちの描出で使用する色と状況設定を見る限りイラーとホーシャの派生形で、やはり昼と夜、善と悪、理想と現実の差異を具現してはいるが、2人が同一人物のもつ2つの対立する側面の擬人化であることを示唆するような状況証拠は作品中の叙述や台詞中に見当たらない。それに、『マーディ』のテーマは失踪したイラー、つまり失われた純潔とイノセンスの探求で、白人キリスト教文明世界の否定というもう1つのテーマがその背後に隠されていたが、『ピエール』では真実対現

実、つまり作者の真理探究精神の擬人化としてのピエールなる「真理の道化」対キリスト教社会の「有徳の便宜主義」が主テーマとなり、副テーマとして、善き天使としてのルーシィと悪しき天使としてのイザベルが具現する天上の愛と地上の愛の対比が描かれている。

ピエールの心に善き天使と悪しき天使の葛藤を生じさせた手紙はシスターと称するイザベルからのものと判明するが、その手紙の文面でピエール自身に天使という概念が適用されている——「あなたは天使のような人で、世間の心ない慣習や流儀を跳び越えられるでしょうか？」（P64）と。さらに、2回目の面談時にはピエールはイザベルに「天使の天使に対する純粋で完全な愛をもってぼくらは愛し合おう」（P154）と言う。そして、ピエールがイザベルとともにデリィも救済する意思を伝えるとイザベルは「あなたは目に見えない天使性の目に見える表象だわ…人が皆あなたのようなだったら、人間は1人もいなくなり、人類は絶滅して最高位の天使ばかりになるわ！」（P156）と言う。このようにピエールは天使に喩えられ、またピエール自身も「キリストのような気持」（P106）で「美徳の道化」（P358）のような行動を貫こうとするが、最終的には「石壁」（P337）のように「彼を取り囲む曖昧なるもの」（*ibid.*）、つまり曖昧な便宜主義ないしご都合主義で動いている世間という障壁を飛び越える超人的天使にはなりえない。

ルーシィを善き天使、イザベルを悪しき天使と呼ぶのはイザベルで、ルーシィがピエールのもとに来て一緒に暮らすことになったことを知らされたイザベルは、狂ったように嫉妬心を発現し、青い目で金髪のルーシィは善き天使で、自分は目も髪も頬も葬儀のように暗い色の悪しき天使だと、自分も青い目で金髪に生まれてきたかったと真情を吐露し、「あなたはどちらかを選ぶことになるでしょう！」（P314）とピエールに言う。

ルーシィかイザベルかの選択にピエールは2度直面する。1度目は、田舎が舞台だった当時のイザベルとの初めての面談後に帰宅したピエールが、ルーシィかイザベルかの二者択一の葛藤に襲われる場面で、そのさまはこう叙述される——「一瞬、ルーシィの愛らしくて包み隠すところのない青い目が現れ、同じようにやさしいが悲しげで謎めいたイザベルの暗い眼差しに取って代わった。彼は2人に挟まれて、どちらか1人を選ばなければならないと同時に、両方とも自分のもののように思えた。しかしルーシィの目にイザベルの悲哀にみちた目が半ば入り込んで重ね合わさった」（P129）。田舎が舞台の作品前半では最終的にピエールはルーシィを犠牲にしてイザベルを選択するが、作品の結末ではピエールは両者を不選択、拒否する。いとこグレンを射殺し投獄された彼に会いに来たルーシィとイザベルに対してピエールは「おまえら2つの蒼白き霊よ、ここがあゝの世の別世界なら、おまえらは歓迎されない。去れ！善き天使も悪しき天使も！ピエールは今や中立だ！」

（P360）と宣言する。これはどういうことか？

善悪両天使に対するこの拒否宣言は何を意味するのか？もしこれがフォースタスの台詞だったなら、これを天国と地獄の存在を否定する発言として解釈することも可能であろう。しかし、ピエールによるこの拒絶宣言は、ルーシィが実践する自己犠牲的で性を伴わない純潔な天上的愛と、イザベルを通じてピエールが体感する情欲ないし性愛、言い換えれば、キリスト教的原罪意識を伴いながらも性を求める人間的な地上的愛のいずれにも与しないというピエール＝メルヴィルの心情の表明と受けとめることができよう。そして、クロノメトリカルな愛とホロロジカルな愛のいずれをも拒否する牢獄内のピエールに、愛をも空（くう）なるものとして認識する作者の姿を垣間見ることができる。なぜなら、作者のこのような認識は、結末に至る前の作品中の2箇所ですでに示唆され暗示されているからである。最初の示唆は、物語開始直後のピエールとルーシィの丘陵デート場面での「愛は空（くう）なるもの、見栄っ張りで誇り高いものよ（Love is vain and proud）」（P37）というルーシィの台詞中に見出せる。さらに作者は、ピエールが自分の「墓石」（P133, 135）にしたいと考えた巨大なメムノンの石にまつわる話の中で、その石に刻まれている謎のイニシャルの意味を問う少年ピエールに対して、親戚の老人が『伝道の書』の文言に目を通してそのイニシャルは「賢者ソロモン」を表していると答えたという回想談を語ることによって、「すべて空（くう）なり」というソロモンおよび作者自身の人生観と世界観を暗示しているのである。

6.1.1 ルーシィ——天上的な無垢と「超人的な愛」

「20歳そこそこ」（P56）のピエールに対して「17歳そこそこ」（*ibid.*）のルーシィ・タータンは、朝の光あふれる物語冒頭から終結の暗闇迫る牢獄内での死に至るまで、一貫して純真無垢そのものの体現者となっており、青と白が彼女の天上性を表す色として使用されている。

メルヴィルの女性描写の源泉は処女作『タイピー』での褐色の肌と黒い髪に青い眼をもつポリネシアの娘フェイ・ウェイトと第2作『オムー』の最後の方で白い子馬に乗って登場する「若く美しい英国人女性」（O295）⁷⁾のベル夫人（Mrs. Bell）にある。語り手である独身青年メルヴィルは、ベル夫人を「ポリネシアで私が目にした中で最も美しい白人女性」（O296）と評し「彼女のあの目、あのモスローズ色の頬、鞍上のあの聖なるたたずまいゆえに、私はベル夫人を私が死ぬ日まで生涯忘れないだろう」（O296）と、若く美しい女性に対する憧憬を語っている。続いて、彼が結婚直後に移り住んだマンハッタンの住居で書いた『マーディ』で探求の対象となるイラーは「長い金髪…雪のように白い肌、青い空色の眼」（M136）をもち、「朝の光の輝きよりも美しい」（M142）白人のブロンドの娘として設定されたが、ルーシィは外見的にはイラーの再来、内

面的にはイラーの進化形となっている。

ルーシィという登場人物の存在理由と存在意義を解釈するにあたって重要な鍵となるのが、青と白の色である。まず青を見てみよう。『モービー・ディック』では、白鯨との3日間におよぶ格闘が始まる日の描写で語り手は、青い空と青い海が水平線で交わるさまを花嫁と花婿が結ばれるさまに喩えて、「男性的な海」(MD542)に対する青い空を「美しい娘の額のような天」(MD543)と比喩的に言い表していた。『ピエール』では、第2書のピエールとルーシィが丘陵へ馬車でドライブに出かける場面で、語り手はルーシィを淡青色の天空に結びつけて「不思議なほどに色白の顔と青い目に金色の髪をした明るいブロンドのルーシィは天と調和する色の服を身につけていた。淡い青がきみの永遠の色だ、ルーシィ。淡い青がきみに一番似合う」(P33)と語り、続く第3書では、ピエールの大好きな苺をもって来たルーシィが夕陽を浴びながら帰って行く姿を見て「ぼくは重い大地に属し、彼女は空気のような光に属す。実に、結婚とは不信心な行為だ！」(P58)とピエールは考える。これらの描写と叙述を総合して判断すると、花嫁イコール青い天空という天上的イメージをメルヴィルがルーシィに投射していることが歴然とする。

次に白であるが、イラーの場合と同様に、白イコール天上的な無垢と純潔というイメージをメルヴィルはルーシィに付与している。彼に苺を買って来たいきさつを打ち明けるルーシィに対してピエールは「この上なく天上的な無垢だ…純潔しか見せるものをもたぬ花は素直に開く」(P57)と言い、語り手は、夕陽に照らされて輝く彼女の顔色を「バラ色の雪のよう」(P58)と形容し、その姿全体に「この世のものと思えぬ儂(はかな)さ」(ibid.)が感じられると語る。メルヴィルが白イコール純潔と認識しているさまは、自分の社会的幸福を放棄してイザベルを救うことを決意し実行に移し始めたピエールの蒼白な顔を見てイザベルが「愛は…冷たくて、栄光は白いの？あなたの頬は雪のように白いわよ、ピエール」(P191)と問いかけるのに対して、ピエールが「そのはずだ。ぼくは純潔だと神かけて信じているのだから」(ibid.)と返答するやりとりの中にはっきりと見てとることができる。

白はまた、死をも意味し、別の女性と結婚したことをピエールから告げられて昏倒したルーシィの住まいを、語り手は「しっかりと閉じられた白いカーテン、深い静けさに包まれた白い家、そして門の前につながれた白い乗用馬」(P186)というように白一色で塗りつぶして死のイメージを与えているが、ルーシィの白は第一義的には天上的な無垢と純潔を表象している。

メルヴィルはルーシィの天上性ないし非地上性を「超人的」という言葉を使用することによって鮮明化し、先鋭化している。第23書に現れるルーシィからの手紙は、彼女の「超人的な愛」(P311)を伝えるものとなっており、その趣旨は——「超人的で天使のような」(P309)行為をして

いるピエールを私は信じ、私の「超人的な務め」(P310)で応じたい。「あなたは私の母であり、私の兄と弟であり、私にとっての全世界、全天空、全宇宙です。あなたは私のピエールです」(P311)。だから、私はピエールたちの傍で暮らし、ピエールたちを守りたい——というものである。そして、ピエールたちの住まいにやって来たルーシィは「超自然的な白さが頬に輝いていた」(P328)のであり「不死の愛」(P329)に支えられていたと語り手は語る。

ルーシィはパンフレット“EI”で言われているところのクロノメトリカルで天上的な指針に従って行動しており、ピエールが亡き父に対して抱いていたかつての心像、すなわち「汚点や曇りのない雪白で静謐な、ピエールの大好きな、人間の完全な善と美德の化身」(P68)という心像は、作品全体を通して、終始一貫してルーシィにあてはまるものとなっている。

6.1.2 イザベル——性的魅力と嫉妬心

イザベル・バンフォードは『マーディ』のホーシャの延長線上にある女性像で、ホーシャがイラーの対極的存在であったように、無垢で天上的なルーシィに対してイザベルは、謎めかし多少神秘化されているが、女の性的側面を表し、情欲を喚起する地上的女性として、また女のプライドと嫉妬心を発現する非天上的存在として描かれている。

彼女を表象する色は黒である。彼女の像はまず「暗い目をし、艶やかで、懇願するように哀しげな顔」(P37)として作品に登場するが、慈善裁縫会でピエールが初めてその顔を見た時の彼女は「暗いオリーブ色の頬」(P46)の下の首元まで黒い服に身を包んでいて、その顔は「彼を魅惑した」(P49)のであった。作品全体を通して、イザベル像の描出は彼女の目と長い黒髪に特化されており、最終的に「漆黒の蔓」(P362)のような髪に彼女の全存在が収斂される。

イザベルはまず初めに、女として、ピエールを性的に魅了したことが暗示されている。彼女の顔を見て「ある種の不健康さ」(P53)が彼の中に生まれ、何日も何日もピエールがその顔を思い出しては悶々としたことを語ることによって、語り手メルヴィルは、彼女が異母姉であることを知らされる以前の段階で、ピエールが男として、女であるイザベルに性的に魅かれたことを示唆している。彼女の黒髪と大きな目がピエールの心に火をつけたことを語り手は「時折…悲しげな長い黒髪が彼の魂の上に落ちて来て、えもいわれぬ哀愁感を漂わせた。愛らしさと苦悩であふれんばかりの大きな両目が彼を見つめ、狙った彼の心に魔法の光線を集束し、そこに不可思議な火をつけた」(P534)と語っている。語り手はまた、イザベルの魅力を「並はずれた肉体的磁性」(P151)と表現し、一言も言葉を交わすことなく肉体的に性的にピエールが彼女に魅きつけられたことを暗示している。

ギターを弾くイザベルの「髪は屍衣にくるまれた姿態 (the hair-shrouded form)」(P126) という描写は、最終場面でピエールの体をおおう彼女の漆黒の髪がもつ意味の表層部、つまり屍衣としての意味の先駆けとなる隠喩である。物語は、牢獄内の床に服毒自殺して横たわるピエールの体に、彼の後を追って自分も毒を飲んだイザベルがおおいかぶさる情景で終わる——「彼女の体は横向きにピエールの心臓部に倒れこんだ。彼女の長い髪が彼の体をおおい、彼の姿は漆黒の蔓におおわれたあずまやと化した」(P362) と、ピエールの心と体をおおう屍衣のようなイザベルの髪の黒色は人の心の暗く悲しい側面の表象として解釈できよう。その側面にあるものとしてこの作品で描かれているものは、すでに言及した人間の情欲に加えて、プライドと嫉妬心であり、「悲哀の都市」(P168) を舞台とする物語後半では、現世での見返りなしにピエールとイザベルに尽くそうとするルーシィに対して、イザベルが女としてのプライドからの対抗心と嫉妬心をあらわにする情景が展開される。

6.2 結論——嫉妬心

『ピエール』はメルヴィルの著作中、最も難解で、『マーディ』、『モービー・ディック』、『信用詐欺師』以上に正当な分析と解釈が困難な作品だと筆者は判断する。なぜなら、この作品には複数の層があり、第1の層、つまりメイン・テーマは「真理の道化」対「有徳の便宜主義」であるが、その下の第2の層に天上の愛と地上の愛の対置という副次的テーマが流れており、さらに、その愛をめぐる副テーマから派生して描出される嫉妬心がこの作品の第3の層の第3のテーマとなって、物語結末で「漆黒の蔓」に隠喩化されているからである。しかも、この嫉妬という最終テーマは、メイン・テーマの一翼を担うご都合主義のグレンにも連結されており、グレンのピエールに対するルーシィがらみの嫉妬心とイザベルのルーシィに対する嫉妬心、およびイザベルのピエールに対する独占欲の描出によって例証されている。

ピエールの心境と生きざまに関するハムレットの引喩と併せて、この嫉妬心に関しても、メルヴィルにとって超えられるべき存在だったシェイクスピアの作品の引喩が見受けられる。イザベルの幼少の頃の記憶に残っている「仲良くなろうとしない猫の緑色のにらみつける目と蛇が出すような声音」(P123) という緑色にまつわる間接的引喩、および少年時代のピエールとグレンおよび他の少年との間の友愛感情の三角関係から発生する「オセロのそれに似た感情」(P217) という直接的引喩は、読者に「それ [嫉妬] は緑色の目をした化け物です」(*Othello*, 3.3)⁸⁾ というイアーゴの台詞を思い起こさせるべく作品内に配置されたものである。

メルヴィルは、フォールスグレイヴ牧師とピエールの幼友だちミルソープを除く主要登場人物全員が程度の差はあ

れ発現する嫉妬心を、ピエール、ルーシィ、母メアリ、イザベル、そして、いとこグレンの順に叙述し描出している。そしてピエール、ルーシィ、および母メアリの嫉妬心に関する語りは、イザベルとグレンが発現する化け物のような嫉妬心への導入のようなものとなっている。順を追って、以下に検証してみよう。

作品中に現れる嫉妬心に関する最初の叙述は、ピエールのそれについてであり、息子ピエールは、しばまない花、アマランスのように若さと美を保つ母メアリに求婚しかねないほどの「美青年たちの熱烈すぎる賛美に言いようのないわずらわしさを感じ、時には嫉妬で我を忘れそうにさえた」(P5) と語り手は語る。

次に作者はルーシィに無害でいたいけな嫉妬心ないし独占欲を吐露させている。ピエールが慈善裁縫会で見た「暗い目をし、艶やかで、懇願するように哀しげな顔」についてピエールと会話した後、ルーシィは涙しながらこう言う——「私には秘密をすべて打ち明けてほしい。愛は空(くう)なるもの、見栄っ張りで誇り高いものよ。通りを歩いていてあなたのお友だちに会った時に私は笑いながら心の内で“あの人たちは彼を知らないわ。私だけが私のピエールを知っているのよ”と欲求不満で思っているのよ」(P37) と、これに対してピエールが、彼女にすべてを打ち明けることを拒み、彼女のいじらしい嫉妬心と独占欲を邪悪な心理として拒絶すると、ルーシィは「ピエール、あなたのためなら私の身は千々に引き裂かれてもいいわ。たとえ私が北極の氷原で凍死しても、私の胸の内にあなたをかくまって、温め続けるわ」(P38) と母性的独占愛と母性的犠牲愛を言葉にする。

母メアリに関しては、亡夫の結婚前の肖像画に対する彼女の「本能的な嫌悪」(P85) の奥には嫉妬心が隠れていると語り手は分析する。つまり「女性の女性らしさなるもの、繊細な嫉妬心あるいは潔癖症的な虚栄心とでも呼ぶべきもの」(P82) ゆえに母メアリは、結婚前の夫が彼女の知らない他の女性に向けていた眼差しを描いた絵を嫌っているのであろうと。

そして作者はイザベル登場後、嫉妬という言葉をあからさまに使用することなしに、子供の頃のイザベルが周囲から敵意と嫉妬をあらわに示された記憶を「仲良くなろうとしない猫の緑色のにらみつける目と蛇が出すような声音」という比喩的表現に集約して語る。

以上が田舎を舞台とする物語前半部における嫉妬心に関する記述と描出であり、ここまでの段階では読者は嫉妬なる人間感情がこの作品のテーマの1つになっているとは認識できない。しかし、作品前半の嫉妬心への言及は、後半での出来事と事件のいわば伏線となっており、後半に入ると嫉妬心が、ピエールに対するグレンの言動とルーシィに対するイザベルの言動における因果関係の因として前面に押し出される。都会への旅の途中でピエールが読むパンフレット“*EF*”に続く物語後半の最初の書に作者はピエール

のいここグレンを忽然と登場させて、ピエールに対するグレンの嫉妬心と憎悪の芽について語り、最終的に嫉妬心と憎悪が動因となって2人は激突する。さらに後半部で作者は、イザベルの嫉妬をあらわにした言動を最終場面を含む複数場面で描出することによって人間心理に潜むゴルゴンもしくはクラケンのような嫉妬心をこの作品の最終テーマおよび最深テーマとして、そして人間心理探究の1つの結論として前面に押し出している。作品最後の「あなたがたは彼を知らないわ！」(P362)というイザベルの台詞に続いてピエールの心と身体をおおう彼女の漆黒の髪的情景が、その嫉妬心を隠喩的に、しかしはっきりと語っている。

では、グレンの嫉妬心とイザベルの嫉妬心の表出を具体的に検証してみよう。グレンの嫉妬心に関しては、まず、少年時代のピエールとグレンおよび他の少年との間の友愛感情の三角関係から生じる嫉妬感情が「オセロのそれに似た感情」として語られ、次に、成人後のピエールに対するルーシーをめぐるグレンの嫉妬が語られる。グレンはかつてルーシーにふられて傷心を癒すためにヨーロッパへ渡ったが、今や、ピエールに代わってサドル・メドウズの館と地所を相続して再びルーシーに求婚しており、ピエールの「かつての恋敵」(P287)グレンは、今では「冷酷にせせら笑う敵」(*ibid.*)と化している。ピエールに対するグレンの嫉妬心について作者は「恋愛事で嫉妬は毒蛇のようなもの」(P336)であり、ルーシーが再びグレンをはねつけて元使徒教会敷地内の貧しいアパートに住むピエールのもとにきたことにより「グレンの嫉妬の毒蛇は倍増した」(*ibid.*)と語る。そして公衆の面前でグレンに頬を鞭打たれたピエールがグレンを射殺するという結末に至る。

グレンの嫉妬だけでも十分に1つのテーマを構成しうるが、イザベルの嫉妬はグレン以上にもっと手の込んだ陰險な様相を呈して表出される。イザベルが嫉妬をあらわにする最初の場面は、ルーシーの手紙を読んだピエールが「彼女が来て、ぼくらと生涯一緒に暮らす」(P312)とイザベルに伝えた時で、イザベルは「その女性を指す語…その彼女！その彼女って！」(P312-3)とヒステリックに聞き返す。彼女を来させるなど言い、彼女のことを詳しく知りたがるイザベルを、ピエールは「姉の嫉妬はやめてほしい」(P313)と言ってなだめようとするが、イザベルは、ルーシーは善き天使で、自分は目も髪も頬も暗い悪しき天使だと、自分も青い目で金髪の善き天使に生まれてきたかったと言う。最終的にこの場面では、ピエールはルーシーの手紙をイザベルに読ませないために隣室のストーブに投じて焼却し、イザベルは「悪しき天使が善き天使に仕えるのかわ…勘違いしないで。彼女の私に対する思いやりよりも私の彼女に対する思いやりが勝るでしょう」(P315)と言って、ルーシーと張り合う気持ちを吐露する。

ルーシーのために用意され整えられた部屋の中でピエール、イザベル、デリィの3人が彼女の到着を待っている朝

の場面での暖房についてのやりとりの中でも作者はイザベルの女の嫉妬心とプライドを見え隠れさせている。イザベルがピエールをじっと見つめながら「パイプをこちらに引き込めないかしら？」(P322)と問うと、ピエールは、イザベルの部屋に引かれているその暖房用パイプは動かさないと返答し、デリィに向かって「ぼくの妻から奪うというのか、デリィ？たとえ、献身的この上なく真心そのもののいとこのためでも」(P323)と訊く。デリィは「いいえ、とんでもございませんわ！」(*ibid.*)と答え、「勝ち誇る炎がイザベルの目に輝いた。豊かな胸を大きくそらせたが、彼女は黙っていた」(*ibid.*)という風にイザベルの姿が描かれる。この場面で作者は、イザベルがピエールの気持を試し、ルーシーよりも自分のほうが大切にされ優先されることを確認して女としてのプライドの充足を感じるさまを描出している。

ルーシーが元使徒教会に来てピエールたちと一緒に住むようになってまもなく、彼女に対する嫉妬心と対抗心をイザベルが狂ったようにあらわにする場面が描かれる。まず、ルーシーがクレヨンで肖像画を描いてパン代を稼ぐ意向をピエールとイザベルに伝えた直後、ピエールと2人きりになったイザベルがルーシーへの「新たな非常に強い感情」(P332)、つまり対抗心をあらわにしながらピエールの傍に迫ると、彼が自分から少し身を引いたのを見て、イザベルは、姉が弟に近づきすぎるというのなら、自分は服毒して死ぬ用意があると身振りで示唆してから、「私は本当にばかだった…けど、彼女に先を越させない！ピエール、何とかして私はあなたのために働かなくてはならない！見て、この髪を売るわ。歯を抜いてもらわうわ。何とかしてあなたのためにお金を稼ぐ！」(P333)と言う。この場面でイザベルは、パン代を稼ぎたいというルーシーの申し出によってと同時に、イザベルと身体的に接触したり抱き合ったりする姿をルーシーの目にさらさないようにと気遣うピエールの言動によって、二重に深く傷つく。イザベルをなだめようとするピエールがイザベルの強さと美しさを美辞麗句でほめたたえと、「彼女[ルーシー]にこんな風に話さなかったでしょうね！」(P334)と嫉妬心をむき出しにして、自分はギターを教えてパン代を稼ぐ意思を表しながら「肖像画を描く人用のお客たちを連れてくる前に、音楽教師の生徒たちを見つけてきて」(*ibid.*)と言う。ギターから適当に音を出すだけで弾き方など知らないイザベルをピエールが抱きしめようとする、イザベルは蛇のように計算して動いてルーシーの部屋のドアの前まで後ずさりし、ピエールがイザベルを抱きしめた瞬間にそのドアを開けて、ピエールがイザベルを抱擁しているさまをルーシーに見せつける——「座っているルーシーの眼前に、ピエールとイザベルはからみ合って立ち、ピエールの唇は彼女の頬に押し付けられていた」(*ibid.*)。まるでイザベルは、ほらね、私のほうが愛されているのよ、私のほうが女として優れているのよ、ピエールは私のものよ、私の勝ち

よと言っているかのようである。ピエールとの抱擁をルーシィに見せつけるに至るまでのこの場面の出来事は、ルーシィの申し出によって、人として、女として、またピエールの名目上の妻としてのプライドを深く傷つけられたイザベルが、ピエールへの献身的愛情の示し合いとピエールからの愛情の奪い合いを、ルーシィとの間で一方的に演じているさまを描いている。

イザベルがルーシィに対する嫉妬と対抗心をむき出しにする場面は、作品最終書での物語の結末一步手前でも描写される。ピエールが根を詰めて書いている本をイザベルは「悪い本」(P348)と呼び、一方、ルーシィは「イザベルと私は、あなたの原稿を書き写して清書するだけでなく、原稿書きそのものも手伝うわ」(P349)と言う。ルーシィのこの申し出に対してピエールが「これは自分の決闘のようなもので、介添人は禁止だ」(*ibid.*)と返答すると、彼女はピエールを憧れの眼差しで見つめる。すると、イザベルはピエールの傍に身を寄せて彼の手をとり、「あなたのためなら私はめくらになるわ、ピエール。さあ、この両目をえぐり出して眼鏡として使って」(*ibid.*)と言って、「彼女は、一瞬だが奇妙な、傲然と挑むような目でルーシィを見た」(*ibid.*)と作者はこの場の情景を語るにより、ルーシィに対するイザベルの対抗心と嫉妬心の発現を描き出す。その後、3人で散歩に出て、画廊に立ち寄った後、湾内を往復する船に乗るとイザベルは北大西洋に出る海に飛びこんで死のうとし、ルーシィとピエールが彼女を引き戻してなだめても、「イザベルはルーシィに深い不信の目を、ピエールには深い非難の目を向けていた」(P355)と作者は語り、イザベルのひがみと嫉妬心の根深さを描出する。

物語の最終場面で、牢獄内に横たわるピエールの遺体におおいかぶさる直前にイザベルが言う「あなたがたは彼を知らないわ!」という作品最後の台詞は、物語開始直後の丘陵デート場面で、隠しごとをせずに秘密をすべて打ち明けてほしいとピエールに語りかけるルーシィの「あの人たちは彼を知らないわ——私だけが私のピエールを知っているのよ」という台詞をこだましている。作者は、嫉妬心と独占欲を如実に表すこの台詞を発すると同時にピエールにおおいかぶさるイザベルの黒髪の「漆黒の蔓」のような情景を嫉妬心のメタファーにしながらこの物語を締め括っている。

この作品は、無垢な青年が冷酷な世間の現実に関眼し、自分を含めた人間の心の奥に潜む情欲と嫉妬とに関眼する物語であり、人間心理の意識上の世界から意識下の領域への探求が登場人物たちの言動を通じて描き出されている。そして意識下の深層心理の領域に潜む嫉妬心、それも情欲に裏打ちされた嫉妬心、情欲と表裏一体の嫉妬心をメルヴィルは摘出したのである。

メルヴィルはこの嫉妬ないし妬みなる負の情動に終生こだわっていたと推察される。なぜなら、遺作『水夫ビリ

ィ・バッド』で彼は、ビリィを陥れようとするクラガートの言動の動機を掘り下げる叙述中でクラガートのビリィに対する「妬みと反感」(BB77)⁹⁾について語り、「妬みというのは…それほどの化け物なのか?」(*ibid.*)と問いながら、若くハンサムで誰からも好かれるビリィ、金髪碧眼で純真無垢なビリィに対するクラガートの猜忌(さいき)心を分析しているからである。メルヴィルの作品中で猜忌(さいき)の念を抱きかつ発現するさまを描かれる主要登場人物は、レッドバーンに対するジャクソン、ルーシィに対するイザベル、そしてビリィに対するクラガートの3人がいるが、ピエールをめぐる悪しき天使イザベルの善き天使ルーシィに対するそれが最も詳細かつ克明に描き出されている。

註

- 1) 『モービー・ディック』のテキストは Herman Melville, *Moby-Dick; or, The Whale*, eds. Harrison Hayford, et al. (Evanston and Chicago: Northwestern University Press and The Newberry Library, 1988) を使用し、引用には、省略されたタイトル、頁を付す。
- 2) 『ピエール』のテキストは Herman Melville, *Pierre; or, The Ambiguities*, eds. Harrison Hayford, et al. (Evanston and Chicago: Northwestern University Press and The Newberry library, 1971) を使用し、引用には、省略されたタイトル、頁を付す。
- 3) 『ホワイト・ジャケット』のテキストは Herman Melville, *White-Jacket; or The World in a Man-of-War*, eds. Harrison Hayford, et al. (Evanston and Chicago: Northwestern University Press and The Newberry Library, 1970) を使用し、引用には、省略されたタイトル、頁を付す。
- 4) 『フォースタス博士』のテキストは Christopher Marlowe, *The Tragical History of the Life and Death of Doctor Faustus*, ed. John D. Jump (London: Methuen & Co Ltd, 1962) を使用した。
- 5) 『マーディ』のテキストは Herman Melville, *Mardi: and A Voyage Thither*, eds. Harrison Hayford, et al. (Evanston and Chicago: Northwestern University Press and The Newberry Library, 1970) を使用し、引用には、省略されたタイトル、頁を付す。
- 6) 拙稿『『マーディ』での若きメルヴィル(2)——喪失と幻滅』(『海—自然と文化』東海大学紀要海洋学部第6巻第3号, 2008) 参照。
- 7) 『オムー』のテキストは Herman Melville, *Omoo: A Narrative of Adventures in the South Seas*, eds. Harrison Hayford, et al. (Evanston and Chicago: Northwestern University Press and The Newberry Library, 1968) を使用し、引用には、省略されたタイトル、頁を付す。
- 8) [] 内の語句は筆者が補った。以下同じ。
- 9) 『水夫ビリィ・バッド』のテキストは Herman Melville, *Billy Bud, Sailor (An Inside Narrative)* (Chicago: The University of Chicago Press, 1962) を使用し、引用には、

省略されたタイトル, 頁を付す.

参考文献

- Adler, Joyce Sparer. *War in Melville's Imagination*. New York and London: New York University Press, 1981.
- Arvin, Newton. *Herman Melville*. New York: The Viking Press, 1950.
- Berthoff, Warner. *The Example of Melville*. New York: The Norton Library, 1962.
- Bowen, Merlin. *The Long Encounter: Self and Experience in the Writings of Herman Melville*. Chicago: The University of Chicago Press, 1960.
- Braswell, William. *Melville's Religious Thought: An Essay in Interpretation*. New York: Octagon Books, 1973.
- Chase, Richard. *Herman Melville: A Critical Study*. New York: The Macmillan Company, 1949.
- Chase, Richard. *The American Novel and Its Tradition*. New York: Doubleday Anchor Books, 1957.
- Davis, Merrell R. and Gilman, William H., eds. *The Letters of Herman Melville*. New Haven: Yale University Press, 1960.
- Dryden, Edgar A. *Melville's Thematics of Form: The Great Art of Telling the Truth*. Baltimore: The Johns Hopkins Press, 1968.
- Feidelson, Charles, Jr. *Symbolism and American Literature*. Chicago and London: The University of Chicago Press, 1953.
- Fiedler, Leslie A. *Love and Death in the American Novel (Revised Edition)*. New York: Dell Publishing Co., Inc., 1966.
- Franklin, H. Bruce. *The Wake of the Gods: Melville's Mythology*. Stanford, CA: Stanford University Press, 1963.
- Gale, Robert L. *Plots and Characters in the Fiction and Narrative Poetry of Herman Melville*. Cambridge, Mass.: The MIT Press, 1972.
- 林信行『メルヴィル研究』東京：南雲堂, 1958.
- Howard, Leon. *Herman Melville: A Biography*. Berkeley and Los Angeles: University of California Press, 1967.
- 桂田重利「メルヴィルと『ピエール』の仮面」, 『神戸外大論叢第10巻第1号』神戸市外国語大学研究所, 1959.
- 桂田重利『まなざしのモチーフ—近代意識と表現』東京：近代文藝社, 1984.
- Lawrence, D. H. *Studies in Classic American Literature*, Penguin Books, 1971.
- Lewis, R. W. B. *The American Adam: Innocence, Tragedy, and Tradition in the Nineteenth Century*. Chicago and London: The University of Chicago Press, 1955.
- Leyda, Jay, ed. *The Melville Log*. New York: Gordian Press, 1969.
- 牧野有通『世界を覆う白い幻影—メルヴィルとアメリカ・アイデオロジー』東京：南雲堂, 1996.
- Mason, Ronald. *The Spirit Above the Dust: A Study of Herman Melville*. Mamaroneck, N.Y.: Paul P. Appel, Publisher, 1972.
- Matthiessen, F. O. *American Renaissance: Art and Expression in the Age of Emerson and Whitman*. New York: Oxford University Press, 1941.
- Maugham, W. Somerset. *Ten Novels and Their Authors*. London: Vintage, 2001.
- Metcalf, Eleanor Melville. *Herman Melville: Cycle and Epicycle*. Westport, Conn.: Greenwood Press, Publishers, 1970.
- 大橋健三郎編『鯨とテキスト—メルヴィルの世界』東京：国書刊行会, 1983.
- Parker, Hershel, ed. *The Recognition of Herman Melville: Selected Criticism Since 1846*. The University of Michigan Press, Ann Arbor Paperbacks, 1970.
- Parker, Hershel. *Herman Melville: A Biography Volume 1, 1819-1851*. Baltimore and London: The Johns Hopkins University Press, 1996.
- Parker, Hershel. *Herman Melville: A Biography Volume 2, 1851-1891*. Baltimore and London: The Johns Hopkins University Press, 2002.
- Porte, Joel. *The Romance in America: Studies in Cooper, Poe, Hawthorne, Melville, and James*. Middletown, Conn.: Wesleyan University Press, 1969.
- Reynolds, David S. *Beneath the American Renaissance: The Subversive Imagination in the Age of Emerson and Melville*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1988.
- Rollyson, C. and Paddock, L. *Herman Melville A to Z: The Essential Reference to His Life and Work*. New York: Checkmark Books, 2001.
- 酒本雅之『砂漠の海—メルヴィルを読む』東京：研究社, 1985.
- Scribner, David, ed. *Aspects of Melville*. Pittsfield, Mass.: Berkshire County Historical Society at Arrowhead, 2001.
- 曾我部学『ハーマン・メルヴィル研究』東京：北星堂書店, 1972.
- Stern, Milton R. *The Fine Hammered Steel of Herman Melville*. Urbana, Chicago, and London: University of Illinois Press, 1968.
- 寺田建比古『神の沈黙—ハーマン・メルヴィルの本質と作品』東京：筑摩書房, 1968.
- Thompson, Lawrence. *Melville's Quarrel with God*. Princeton, N.J.: Princeton University Press, 1952.
- Wadlington, Warwick. *The Confidence Game in American Literature*. Princeton, N.J.: Princeton University Press, 1975.
- Weaver, Raymond M. *Herman Melville: Mariner and Mystic*. New York: Cooper Square Publishers, Inc., 1968.
- Wright, Nathalia. *Melville's Use of the Bible*. Durham, N.C.: Duke University Press, 1949.

要 旨

『ピエール』は、純真な青年が冷酷な世間の現実に関眼し、人間の心の奥に潜む情欲と嫉妬とに目覚める物語である。「真理の道化」たるピエール対世間の「有徳の便宜主義」という主テーマに付随して、その下には天上の愛と地上の愛の対置という副テーマが流れている。さらに、主・副テーマから派生的に描出される嫉妬心が、第3の最終テーマとして、ピエールに対するグレンの嫉妬、およびルーシーに対するイザベルの嫉妬の発現を通して例証される。

ルーシーとイザベルは『マーディ』の無垢で純潔なイラーと高慢で官能的なホーシャの進化形で、それぞれ、天上的で超人的な愛と地上の肉体の愛を体現している。ルーシーは善き天使として天上的な青と無垢の白で、イザベルは悪しき天使として黒で描かれ、最終場面でピエールの心と体をおおうイザベルの「漆黒の蔓」のような長い黒髪は、情欲と嫉妬心を宿す人の心の暗く悲しい側面の表象となっている。